了誉聖冏の神道図像学――『麗気記私鈔』『麗気記神図画私鈔』の考察から――

鈴木英之

一、神道図像と『麗気記』

中世の神道論において、図像は、言説とならぶ秘事のひとつであった。図像は、本来不可視のものを視覚化することで神々の深秘を明らかにし、その一方で、密教教理を用いて高度に象徴化することで、深秘をよりいっそう深秘ならしめる役割を担っていた。そこに描かれるさまざまなイメージは、行者が観想などを通じて直感的に獲得した悟りの表象、宗教的な事実そのものであり、その解釈は、秘伝として師から弟子へと受け継がれていった。

こうした神道図像[1]は、儀軌などに描かれる密教図像のヴァリエーションのひとつであったと考えられ[2]、密教系の神道論である両部神道の伝書を中心に数多くおさめられている。なかでも、ずば抜けて多くの図像を収録しているのが『麗気記』である。

『麗気記』は、中世で大きな影響力をもっていた両部神道書のひとつで、伊勢神宮をめぐる神や社殿などを密教の立場から解釈したものである。弘法大師や聖徳太子らの編とされるがもとより仮託で、鎌倉中～後期頃に、伊勢神道・両部神道の教理に通じた密教徒により編纂されたものと推測されている[3]。

『麗気記』は、本文十四巻、神体図記四巻の全十八巻からなり、神体図とよばれる約五十種もの図像を収録してい

る。なかでも、神体図記四巻は図像のみの巻であり、神像や神宝、曼荼羅など、約四十種の神体図が集中して描かれている。本文の中には、図像を介さなければ理解できない記述もあることから、神体図と本文はほぼ同時に成立し、『麗気記』[4]を読み解く上で不可欠なものであったと考えられている。

しかし、神体図にはほとんど説明が記されていないため、それだけですべてを理解することは中世の学僧といえど困難であった。とくに『麗気記』の成立に近い古写本には、ほとんど注記が認められないことから、図像が、当初より口伝とともに伝授すべきものであったことがうかがえる。[5]

天台僧良遍による『麗気記』の講義を筆録し、『麗気聞書』（応永二十六年成立）を編纂した頼舜は、神体図について次のようにのべている。

注時雖レ易レ知、口伝セサレハ難レ解事也。故可レ仰二師説一。[6]

師資の間で交わされる口伝がなければ、自力で神体図を理解することはむずかしい、だから師に教えを請うべきだ、と。

図像をいかに解釈するか。それは麗気記をめぐる重要な研究テーマとなり、さまざまな註釈書で論じられることとなった。『麗気記』の註釈書は数多く残されているが、なかでも、神体図にかんしてもっとも詳細な註をもっているのが、了誉聖冏（一三四一～一四二〇）の麗気記註釈書である。

了誉聖冏は、室町期に活躍した浄土宗鎮西流白旗派の僧侶である。後に浄土宗中興の祖とよばれたほどの碩学であったが、晩年になってから『麗気記』の研究に熱心にとりくみ、応永八年（一四〇一）前後に『麗気記私鈔』『麗気記神図画私鈔』『麗気記拾遺鈔』（以下『私鈔』『神図画私鈔』『拾遺鈔』）という三書の註釈書を連続してあらわした。[7]

周知の通り、浄土系諸派は専修念仏という教理上の制約から神々と距離を置いていた。そのため、聖冏の神道論というと、どこか異端の、浄土教学にもとづく特殊なものと思われがちだが、実はそのほとんどが密教説や両部神道説にもとづいている。[8]たとえば、上記の麗気記註釈のうち、浄土教学が用いられているのは『拾遺鈔』だけで、『私鈔』『神図画私鈔』は、了誉の名がなければ密教徒の著作といってよいほどの内容をもっている。

『麗気記』は、神道灌頂（日本紀灌頂・麗気灌頂）という儀礼を通じて『日本書紀』と一具のものとして伝授された。聖冏は『日本書紀』の註釈書もあらわしていることから、何らかの密教流派より神道灌頂を受けたと推測される。[9]また聖冏の解釈が、東国で幅広く流布した麗気記註釈書『麗

気記抄』に多くをよっていたことを考えれば、[10] 聖冏の神道論はけっして特殊なものなどではなく、むしろ東国における比較的主流の両部神道説を核として展開されていた可能性が高い。

それゆえに聖冏の麗気記註釈は、中世学僧による具体的な『麗気記』受容のすがたを知るための貴重な資料となりうる。ほどこされた註釈の多さもさることながら、神体図に関する豊富な記述を有しており、他書ではみられない、さまざまな解釈を知ることができる。

そこで本稿では、聖冏の麗気記註釈のうち、『麗気記』巻一から巻十四までの註釈書『私鈔』と、神体図記四巻の註釈書『神図画私鈔』における神体図解釈の考察を行う。とくに両部神道で重要視される、両部曼荼羅（胎蔵界曼荼羅・金剛界曼荼羅）にまつわる解釈を中心にとりあげ、諸註釈との比較を行いながら、神体図の教理的な位置づけや役割について考察する。

二、神体図解釈の諸相

神体図を解釈する上で、口伝が必要となる理由はいくつかあげられるが、大きな理由のひとつに、『麗気記』本文と図像とがうまく合致しない場合がある。図像はあるのに本文に対応する記述がなかったり、逆に記述はあるのに対応する図像がみあたらないときに、口伝を媒介させることでそのずれを結びつけるのである。

次に掲げたのは、『麗気記』巻十一「神形注麗気記」である。文字通り、神の形（曼荼羅）についてのべる巻で、四つの輪と鏡が示されている。すなわち「九輪」「八葉」「五大月輪」「四智鈴」である。

一輪中有二九輪一。廻二地水火風空一、各々三昧耶身也。（中略）
一鏡中有二八葉一。八葉間在二半三股一。（中略）
一鏡中有二五大月輪一。月輪間有二八輻金剛輪一。（中略）
一輪中四智鈴者、中央独一法身（ノミノミ）玉（タマ）霊神、説法利生標示也。[11]

素直によめば四つの図像が描かれているはずだが、『麗気記』巻十一には、胎蔵界曼荼羅（第一図）と金剛界曼荼羅（第二図）とおぼしきふたつの図像しか描かれていない（図1参照）。

第一図の胎蔵界が「半三股」をもつ八葉、第二図の金剛界が「八輻金剛輪」をもつ五大月輪であることは明らかだが、のこる九輪と四智鈴の図がみられない。

・九輪　→　未詳
・八葉　→　第一図（胎蔵界）

・五大月輪→第二図（金剛界）
・四智鈴　→　未詳

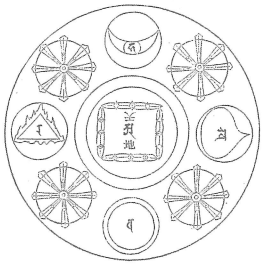
このように、本文と図像が単純には一致しない場合、もっとも簡単な解決方法は、不足した図像を別に求めることである。たとえば、聖冏が影響を受けた『麗気記抄』では、四智鈴の図は書き落としたのではないか、「金剛宝山記」にあるのだろうとの見解を示している。

一輪中四智鈴文。此御図カキヲトシタルカト覚也云云。諸鈴画図有也。但金剛宝山記有ヤラム。(12)

また、頼舜は『麗気聞書』で、ここに「絵」はないが、九輪と四智鈴に該当する図像が「切出」として「別」にあるとのべている。

一輪中。在別記文此段絵無。切出可有也。但文明鏡故、不及見絵云々。（中略）一輪中四智。標示也文是当章絵無。別切出有也云々。今度在京之時尋出、良遍以御意十一巻書入之。(13)

第一図（胎蔵界）



第二図（金剛界）

図1　『麗気記』巻十一「神形注麗気記」所収図像

中世神道の言説が、註釈というかたちで際限なく増殖していたことを考えれば、切り紙のような形で新たな図像が存在していたとしても不思議はない。しかし、『麗気記抄』で、四智鈴図があるという「金剛宝山記」は、『麗気記』に引用されるほかは実態のない書物であったと考えられ、実際に図像はなかったものと推測される。また、頼舜も「切出」があるといいながら、九輪については、絵をみるにはおよばないとし、四智鈴も、次の機会に師である良遍に尋ねようというのだから、やはり現物はみていなかったことがわかる。これはいったい何を意味しているのか。

『麗気記』には、本文と神体図記をあわせて約五十種の神体図がおさめられているが、管見の限り、新たな図像が加えられた例は、ひとつも認められない。(14) また註釈書においても、他の図像の存在が明示された例は確認できない。神体図の構成は、厳格に規定されていたと考えられ、別に図像があった可能性はきわめて低い。

『麗気記』で説かれる両部神道論は、密教の胎蔵界曼荼羅・金剛界曼荼羅を伊勢神宮の内宮・外宮に配当したものであり、内宮・天照太神を胎蔵界大日、外宮・豊受太神を

金剛界大日と同体とし、実には唯一不二であると説く思想である。それ故に、曼荼羅にかんする教説は、神道論の根幹をなしており、曼荼羅図の解釈も当然重要なものであったと考えられる。しかし、解釈に必要な口伝を受け継ぐことができなかったのだろう、頼舜らは、図像と本文とのずれを埋めることができなかった。そこでやむを得ず、『麗気記』の外に実在しない別の図像を想定することで、とりあえずの解決をはかったと考えられるのである。

これに対して、新たな神体図を外に求めることなく、『麗気記』の中だけで確固たる解釈を示したのが聖冏である。

聖冏は、神体図を註釈するにあたって『麗気記抄』より大きな影響を受けていたが、[15]子細に検討すると、単なる引用関係ではなく、『麗気記抄』とは異なる口伝によったとおぼしき独自の解釈をみることができる。

聖冏は、『私鈔』巻十一で、まず九輪と八葉について註釈をほどこし、

此乃上一輪中有九輪等、正挙此図大綱。次、一鏡中有八葉等者、重述此図細尺。非是挙別体ヲ。故是此巻奥アル初図也。[16]

と、九輪は第一図の「大綱」を、八葉は「細尺」をのべただけで、実は同じ図像の説明なのだと、この難問をいともたやすく解決してしまう。[17]八葉輪と中央の一輪をあわせて九輪とするのだが、わかってしまえば簡単なことで、口伝がなければ理解しがたいという神体図の特徴をよくあらわした事例といえる。

興味深いのが、四智鈴図の解釈だ。聖冏は、四智鈴図が秘された結果失われてしまったのではないか、または書き落としたのではないか、という『麗気記抄』の解釈を示した上で、「今私云」として謎の図像を提示する。それが「瑜祇不二ノ図」である。

一輪中四智鈴者、此図秘失歟、書落歟云。今私云、此下瑜祇不二図有レ之。今指レ之而云二一輪中四智鈴等一歟云。此図瑜祇不二事、於二一輪中一有二胎金両部表形一故也。[18]

瑜祇不二図とは、曼荼羅の中心にある「一輪」のなかに、胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅両部の「表形」を兼ね備えたものだという。[19]

- 九輪　→　第一図（胎蔵界／大綱）
- 八葉　→　第一図（胎蔵界／細尺）
- 五大月輪→　第二図（金剛界）
- 四智鈴　→　瑜祇不二図

それでは、瑜祇不二図とはいかなるものなのか。聖冏は、具体的な形容についても述べており、

輪宝・宝珠・半月・羯磨、如レ次四方四仏ノ表形也。経図・半月形中利剣・蓮花・三股、亦如レ次普賢・文殊・観音・弥勒四菩薩表形也云々。此五仏四菩薩、即是八葉九尊表形也。謂、一輪中九輪、胎蔵八葉九尊表形也。其中東南西北方円三角半月団形等、金剛界五方五仏表形也。[20]

と、輪宝や宝珠、半月など八つの三摩耶形が描かれた図で、胎蔵界の八葉九尊と、金剛界の五方五仏の形を表すものだとしている。

だが、いくら形容しようとも、実在しない図像を掲げたのでは意味がない。先述の通り、神体図は、基本的に新たな図像が加えられることはないため、もし実在するならば、必ず『麗気記』中に該当するものがあるはずである。そこで神体図をひとつずつみていくと、ぴったりと合致する図像を見出すことができる。それが、一名「九尊三形曼荼羅」と呼ばれるものだ（図2参照）。

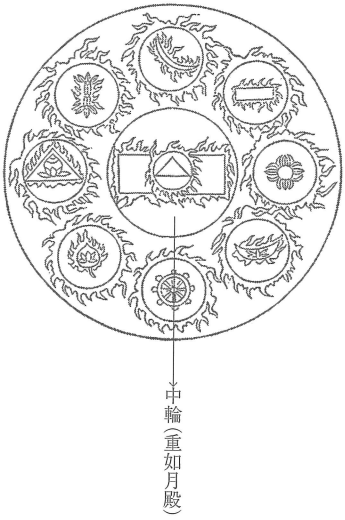


図2　瑜祇不二図（九尊三形曼荼羅）

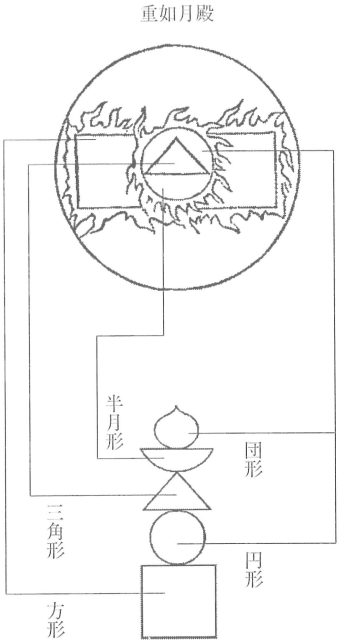
聖冏の形容通り、胎蔵界曼荼羅を基本的な形として、九つの輪の中に、さまざまな三摩耶形や、円形や三角形などの幾何学的な紋様が描かれていることがわかる。[21]『麗気記』諸本中に、これを巻十一には、この九尊三形曼荼羅＝瑜祇不二図がたしかに存在していたというのだ。[22]

ではなぜ、瑜祇不二図が胎金不二を表すのか。秘密を解くカギは、「重如月殿」と呼ばれる中輪部分にある。聖冏はつづけて述べる。

又、中輪中ニ有二方形一。々々ノ中ニ有二団形一。通二団円二形一ニ。其団形中有二三角形一。三角形傍ハツレノ処、下団形少見、半月形也。故知、此中台即是五輪具足重如月殿也。故云二中央独一法身玉霊神等一云。[23]

胎蔵界の中心にある「中輪」（中台）には、金剛界を象徴する「五輪形」すなわち「方形」「円形」「三角形」「半月形」「団形」がすべて具わっている。だから、この中台部分は、「五輪」を「具足」する「重如月殿」なのであり、さら

図3　重如月殿と五輪形



には、『麗気記』でいう「中央独一法身玉霊神」という神をあらわしたものにほかならないのだという（図3参照）。

つまり、「重如月殿」と呼ばれる瑜祇不二図の中台部分は、胎蔵界と金剛界、ふたつの曼荼羅の形表をひとつの図像であらわしたものであり、それはまた胎金不二・内外両宮不二を象徴する唯一絶対なる法身の神をあらわしたものだというのだ。

このように聖冏は、『麗気記抄』を基礎としながらも、それとは異なる口伝によったとおぼしき独自の解釈を施していた。瑜祇不二図とは、密教説をもちいて胎金不二という神宮最大の秘伝を図示したものであり、中心にある重如月殿は、内外両宮を統合する究極の一神をあらわした聖なる紋様であった。聖冏の神体図解釈は、この重如月殿という深秘の図像を中心として展開されていくこととなる。

三、重如月殿――『麗気記』のコスモロジー

重如月殿は、もともとは空海の『法華経開題』や『教王教開題』などにみられるものである。『法華経開題』には、

双円性海常談二四曼自性一、重如月殿恒説二三密自楽一、人法法爾、興廃何時、機根絶絶、正像何別。[24]

とあり、自性法身の絶対的な真理の境界を示すものとされる。ただし、『麗気記』にそのままの用例は確認できないことから、やはり『麗気記抄』によったものと推測される。

『麗気記抄』では、『麗気記』巻十二「三界表麗気記」に描かれる三つの曼荼羅（図4参照）について註釈をほどこし、

示云、灌頂根元在二此巻一。奥アル図両界也。初金、後胎、三五部五輪方・円・三角・半月・団形也。重如月殿是也。五峰楼閣此ナレル形也。[25]

と、初図を金剛界曼荼羅、後図を胎蔵界曼荼羅、そして第三図を、問題の「重如月殿」としている。

この短い記述に、聖冏は強いこだわりをみせる。

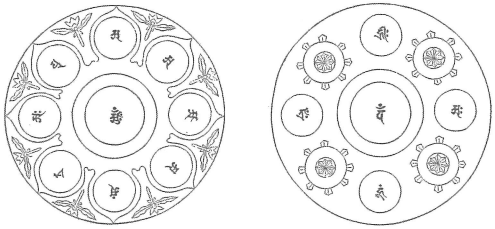
聖冏は、『私鈔』巻十二で、『麗気記抄』を「口伝」とし

て引用し、第三図の「重如月殿」を「両部不二」をあらわすシンボル（「標幟」）だと位置づけた。

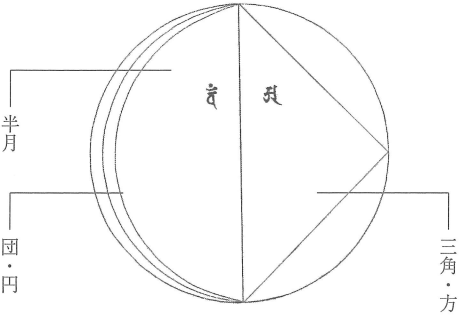
口伝云、灌頂根元此巻有。奥有初図金剛界。次図胎蔵界。第三図五部五輪重如月殿、是両部不二標幟也。[26]

さらに別の箇所でも、第三図を、両部不二をあらわし、五輪形を具足する重如月殿だとした上で、詳細な図像の解読をおこなっていく。

後一図、両部不二五輪具足重如月殿也。謂、惣体円形、亦是団形也。左三角方形スミチカヘニヲリタル姿ナレハ方形・三角二也。右半月如二其形一。此乃五輪具足一輪。重如月殿。[27]此是不二瑜祇重、無相三密表也。



初図（金剛界）　後図（胎蔵界）



第三図（重如月殿）

図4　『麗気記』巻十二「三界表麗気記」図像

重如月殿図は、幾何学的な紋様があるだけで、一見何だかよくわからないが、実は、先の瑜祇不二図と同じ要領で読み解くことができる。[28]すなわち、全体の円は「円形」と「団形」をあらわし、曼荼羅からみて左、向かって右に「三角」があり、それは「方形」を、折り紙のように半分に折ったものとされる。そして曼荼羅からみて右、向かって左側に「半月」がある。だから、重如月殿は、一輪の中に五輪形を具足し、胎金両部不二をあらわす「瑜祇不二」の重であり、仏のはたらきである「無相三密」の表象にほかならないのだという。

つまり、重如月殿とは、巻十一でみた瑜祇不二図の中台部分を、別のかたちで表現したものなのである。また、曼荼羅中にある梵字のうち、向かって右は阿字、胎蔵界＝内宮の天照太神を象徴し、向かって左は鑁字、金剛界＝外宮の豊受太神を象徴する。それ故に、重如月殿図は、胎金不二と同時に、内外両宮が不二であることも示した、神宮の深秘をもっとも高度に象徴化した図像といえるのである。

さらにいえば、巻十二の三つの曼荼羅と、巻十一の三つの曼荼羅は、重如月殿を核としてパラレルの関係にあり、

みなが同じく両部不二、内外不二という神宮の深秘、『麗気記』のコスモロジーをあらわしていると考えられる。こうした解釈は、重如月殿図にかんする解釈がほぼ忘れ去られていた『麗気記抄』では、到達しえないものといえよう。

また、神体図は「三界表麗気記」に記される天札抄文ともリンクしていく。

天札抄文とは、灌頂を受けなければみることも許されない、『麗気記』でもっとも極秘とされていた文のことである。内容は、大梵天である胎蔵界大日と金剛界大日が、天照太神と豊受太神として伊勢の内外両宮に降化・鎮座したこと、内外両宮は胎金両部曼荼羅にほかならず、実は不二であるのだという神宮の秘伝を、真言や儀礼の所作とともに明かしたものである。[29]

天札抄文の末尾には、『麗気記』の主題である両部不二が説かれているが、

如是両部一会和合・常住不変妙体也。不可定前後、難分両部。不二不思議妙用、三千即一神籬也已上、天札抄文也。[30]

聖冏はこのくだりを、「瑜祇重」であるとの解釈を示した。

如是両部等已下、瑜祇重也云註。[31]

この解釈が、両部不二をあらわす曼荼羅が「瑜祇不二図」とされ、重如月殿図が「瑜祇不二ノ重」とされていたのと共通の意識のもとにあることは明らかである。

このように神体図は、言説・儀礼と密接に関係し合いながら、ともに『麗気記』の深秘をあらわすものであった。胎金両部の表形たる重如月殿図が、最極秘の天札抄文と同じ巻に描かれていたのは、当然のことだったのである。

四、日本紀本尊と重如月殿——変容する三種神宝

重如月殿を核として、『麗気記』のコスモロジーが神体図全体につらぬかれていたことがわかったが、それは神道灌頂において珍重された日本紀本尊も例外ではなかった。

日本紀本尊とは、『麗気記』巻十三「現図麗気記」にもとづき描かれた三種神宝図（神体図記所収）が、『麗気記』より独立したものだ。聖冏が、

三種表形図画可安置之故云守護文也云々。[32]

と述べるように、神道灌頂の際に本尊として安置されたもので、仁和寺や長谷寺などに作例が残されている[33]（図5参照）。

三種神宝というと、一般的には宝剣・神璽・内侍所があげられるが、問題となるのが内侍所のあつかいである。なぜなら『麗気記』諸本をみる限り、本尊図は、宝剣である「一柄三霊天叢雲剣」と、神璽である「天瓊杵玉」（鬼面独

鈷）のふたつしか描かれておらず、内侍所に該当する図像はみられないからだ。

そのため良遍は、

独古ハ神璽、箱ハ内侍所、剣ハ宝剣也。半月ハ内宮也。三古ハ外宮也。[34]

と、宝剣の下に描かれる六角形の箱らしきものを内侍所としたり、

一、当巻剣独古中間、三種神体入箱也云々。[35]

と、三種神宝を入れる箱であるとの解釈を示していた。また、日本紀本尊図のなかには、複数の神体図を組み合わせて一幅とした「内侍所図」をもつものもあり、[36]その解釈にはかなりの幅があったことが知られる。

このように多様な解釈が生まれることとなった原因は

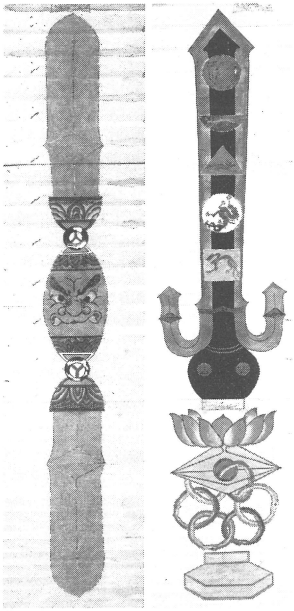


図5　「日本紀本尊」（仁和寺本）

宝剣　神璽（鬼面独鈷）

『麗気記』本文にあると考えられる。実は、本尊図の典拠となる「現図麗気記」には、内侍所の名がまったくみられない。そのため、いったいどの記述が内侍所について述べているのか判然とせず、選択箇所によって解釈に相当の開きが生まれてしまうのだ。

このみえざる内侍所を明らかにすべく、聖冏は、ここでも重如月殿を核として解釈をほどこしていく。

次に掲げたのは、『神図画私鈔』における三種神宝についてのべた箇所である。

一巻是第十三現図巻別出也神財。

一柄三霊図

是立剣三峰三握剣也。形表共如前鈔云。

天瓊杵玉図

是ハ鬼面独古也亦如前云。

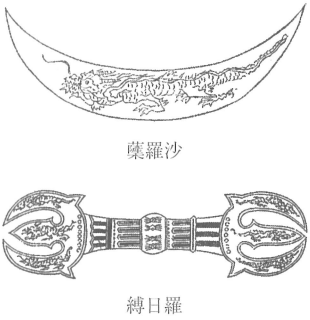
藥羅沙図

是重如月殿本形也。三日月形遠見形也云。[37]

宝剣と神璽は同じだが、注目すべきは内侍所である。驚くべきことに、聖冏が所持する『麗気記』には、内侍所として「藥羅沙」という「三日月形」の図があったという。しかも、それは「重如月殿」を「遠ク」からみたものだというのだ。

藥羅沙とは、「現図麗気記」の末尾に描かれる三日月形

図6　薬羅沙と縛日羅（巻十三所収）



（薬羅沙）と三鈷杵（縛日羅）というふたつの神体図にかんする記述にもとづいていると考えられる（図6参照）。麗気記には次のようにある。

重如月横立者、薬羅沙・縛日羅、文武二道、定慧横竪妙体、国中安寂吉瑞也。[38]

聖冏は、『私鈔』で、若干改変を加えてこれを引用し、

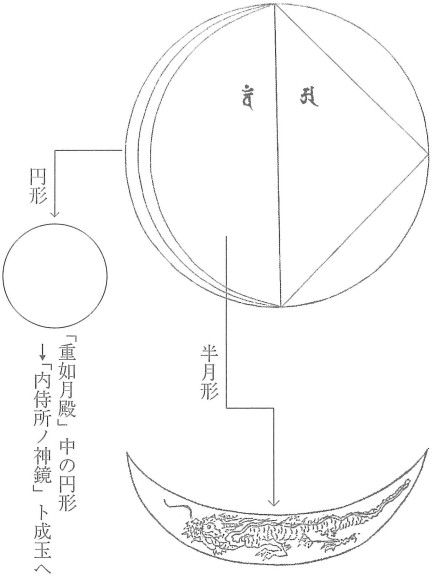
文云　薬羅沙、重如月横立。亦云：文武二道定慧横竪。故云。

と、薬羅沙（三日月形）だけを「重如月横立」とした上で、次のように内侍所を位置づけていく。

重如月横立者、常恒説法、三界表巻奥図也。但今只其半月形而已、迺是三日月形也。（中略）此薬羅沙、五輪具足月殿ノ中円形、内侍所神鏡成玉ヘリ。[39]

薬羅沙（「重如月横立」）とは、「三界表巻」の奥の図＝重如月殿図のことである、今は、重如月殿に描かれていた五輪形のうちの「半月形」、すなわち「三日月形」の姿で描かれているが、もともとは「円形」であり、「内侍所ノ神鏡」と成るのだという（図7参照）。

図7　重如月殿と内侍所



つまり、内侍所＝薬羅沙とは、「現図麗気記」の奥にある三日月形の図像のことであり、両部不二を象徴する重如月殿に内包する五輪形より展開したものにほかならないというのである。[40]

このように、曼荼羅も、三種神宝も、重如月殿にふくまれる五輪形の展開した姿であり、究極的には、そのひとつひとつが唯一不二の神宮の深秘をあらわしていた。神体図は、麗気記本文や灌頂儀礼と一体となって機能し、さらには王権のシンボルたる三種神宝にさえ変容をうながす、

『麗気記』の重要な構成要素のひとつだったのである。

五、結語

中世の神道論において、図像は、言説とならぶ重要な秘伝のひとつであった。しかし、その解釈は口伝に多くをよっていたため、きわめて流動的なものであった。たとえ同じ図像をみていたとしても、どの秘説を受け継ぐかによって方向性は全く異なっていく。今みている図像は何を描いているのか、いかなる意味をもつのか、それは視覚的・感覚的な情報をあつかう図像という媒体の性格上、ときに言説以上に大きな解釈のゆれを引き起こした。

聖冏は、『麗気記』におさめられる神体図を解釈するにあたり、東国で流布していた麗気記註釈書『麗気記抄』をもとにしていたが、それとは大幅に異なる解釈を導き出していた。おそらく、聖冏の図像解釈と、『麗気記抄』の図像解釈の淵源は、さかのぼれば、かなり近しいところにあったものと推測される。しかし、伝授が繰り返されるうちに、いつしか分岐し、解釈が変容していったものと考えられる。

『麗気記抄』では、秘伝が忘れ去られ、もっとも重要な曼荼羅の解釈すら判然としなくなっていた。一方、聖冏は「瑜祇不二図」「重如月殿」という図像を『麗気記』より「再発見」することで、独自の解釈を展開した。

聖冏にとって、すべての神体図の根元は、両部不二・両宮不二を象徴する「重如月殿」という深秘の図像だった。曼荼羅も三種神宝も、月殿図が内包する五輪形の展開形であり、唯一不二という『麗気記』のコスモロジーを示すものであった。それはまた、麗気記本文や灌頂儀礼と一体となって機能する、神宮の深秘そのものであったということができるのである。

聖冏の神体図解釈は、いわば神学ともいえるような、精緻な探求の営みだったのである。

注

(1) 門屋温氏は、図像とそれに付随する言説を組み合わせて考察し、図像の意味を読み解く研究方法を「神道図像学」と名づけ、その重要性について論じている。本稿は、門屋氏の論考に多くの示唆を受けている。(門屋温「「神器・神宝」考―神道図像学の試み―」『日本学研究』五、二〇〇二・六)参照。

(2) 密教図像は、白描や淡彩で描かれた仏や印明、曼荼羅などの図像のことをいう。美術的な価値よりも、密教教理を解き明かすための資料としての価値を重視することに特

徴がある。

(3) 『麗気記』の概要・研究史については、神仏習合研究会編『校註解説現代語訳 麗気記Ⅰ』(法藏館、二〇〇一)の各解説、「『麗気記』にみる中世」(『日本思想史学』三三、二〇〇一・九)の各報告参照。

(4) 門屋温「「神体図」との関連について」(『麗気記Ⅰ』所収)、同「『麗気記』の図像学—中世神道のイメージとシンボル—」(『日本思想史学』三三、二〇〇一・九)参照。ほかに神体図をあつかった先行研究としては、山本ひろ子「霊的曼荼羅の現象学—中世神道の「発生」をめぐって—」(『「私」の考古学』岩波書店、二〇〇〇)、三橋正「『麗気記』の構想と「神体図」—密教による神の理論化と図像化—」(速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館、二〇〇六)、同「密教儀礼から神道論へ」(『東洋の思想と宗教』二二、二〇〇五・三)、拙稿「『麗気記』所収「神体図」の受容と展開—聖冏・良遍著作の検討から—」(『神道宗教』二一三、二〇〇九・一)など参照。

(5) たとえば、鎌倉時代後期の古写本である金沢文庫蔵「神体図記」(剱阿手沢本)には、たった一箇所しか注記は認められない。

(6) 良遍『麗気聞書』巻十七「神形図麗気記」(神道大系『真言神道(上)』二七三頁)。

(7) 聖冏の麗気記註釈については、高瀬承厳『麗気記私鈔・麗気記拾遺鈔』(森江書店、一九三三)、松田貫了「麗気記拾遺鈔解題」(『浄土学』五・六合併号、一九三三・一〇)、嵐瑞澂『聖冏の神道論について』(『明治聖徳記念学会紀要』五四、一九四〇・一〇)、徳江元正「〔翻刻〕麗気抄(其一)」(『日本文学論究』五三、一九九四・三)、拙稿「了誉聖冏『麗気記拾遺鈔』における神体—教相判釈される神々—」(『宗教研究』三五八、二〇〇八・一二)など参照。

(8) 聖冏の神道著作のうち浄土教理を用いたものは、『拾遺鈔』のほかは、初期の著作である『鹿島問答』しか確認できない。『鹿島問答』については、拙稿「了誉聖冏『鹿島問答』における本地垂迹説」(『東洋の思想と宗教』二二、二〇〇四・三)参照。

(9) 久保田収「聖冏の『日本書紀私鈔』」(『日本書紀研究』七、一九七三・六)参照。

(10) 『麗気記抄』は、灌頂の場で使用されたことが確実視される『麗気制作抄』の後半部と共通するもので、東国を中心に流布していたと考えられている。内田康「了誉聖冏著『麗気記神図画私鈔』考—筑波大学所蔵本の翻刻と紹介を兼ねて—」(『日本伝統文化研究報告・平成三、四年度版』筑波大学文芸・言語学系、一九九五・一)、落合博志『日本紀私見聞』解題(『調査研究報告』二一「願教寺蔵主要資料紹介」、国文学研究資料館文献資料部、二〇〇九・

九）参照。

（11）『麗気記』巻十一「神形注麗気記」（神道大系『真言神道（上）』七四頁）。以下、『麗気記』の引用は神道大系本、神体図の引用は弘法大師全集本を用いる。なお、小稿における引用は、そのほとんどを通行の字体に改め、私に訓点、返り点を付した箇所がある。また、諸本により一部字句を改めた箇所がある。以下同じ。

（12）『麗気記抄』第十一「神形注麗気記」。『麗気記抄』は、願教寺本『日本紀私見聞』所収のものを使用する（『調査研究報告』二一「願教寺蔵主要資料紹介」所収）。以下同じ。

（13）良遍『麗気閑書』巻十一「神形注麗気記」（神道大系『真言神道（上）』二六二頁）。

（14）森本仙介「『麗気記』の諸本」（『麗気記Ⅰ』所収）参照。神体図の厳格さは、密教図像が、儀軌や図像集などにもとづき厳格に規定されていたことを想起させる。これは『麗気記』の担い手が密教徒であったことと無関係ではあるまい。

（15）内田康注（10）前掲論文参照。なお、聖冏所持の神体図記の配列と、『麗気記抄』が依拠した神体図の配列は一部異なっており、それに起因する解釈の相違もいくつか確認できる。

（16）聖冏『麗気記私鈔』巻十一「神形注麗気記」（筑波大学本）。以下、『私鈔』の引用は、筑波大学本を用いる。

（17）三橋正氏は、『麗気記』本文の検討から、聖冏と同じく「第一の円鏡について二つの解説文」があることを指摘する。三橋正注（4）前掲論文参照。

（18）聖冏『麗気記私鈔』巻十一「神形注麗気記」（筑波大学本）。

（19）瑜祇不二という名称は、胎金両部不二を説く秘経として知られる『瑜祇経』（『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』）の教説を念頭に置いたものと考えられる。『瑜祇経』は、胎蔵・金剛の両部不二を説く経典で、東密・台密ともに用いられた。愛染明王の唯一所依の経典として知られ、伊勢をめぐる神道説にも大きな影響を与えたことが知られている。

（20）聖冏『麗気記私鈔』巻十一「神形注麗気記」（筑波大学本）。

（21）小稿で引用した弘法大師本（版本）の当該図は、一部簡略化されており、聖冏の形容とは合致しない箇所もあるが、真福寺本や金沢文庫本などの古写本には、形容通りの図像が描かれている。

（22）『神図画私鈔』にも「次ニ瑜祇不二図有リ」とみえる。筑波大学本には「次有「瑜祇。不」可」図」とあるが、法然院本により改めた。嵐瑞澂注（7）前掲論文参照。以下、『神図画私鈔』の引用は、筑波大学本（内田康注（10）前掲論文所収）を使用する。

（23）聖冏『麗気記私鈔』巻十一「神形注麗気記」（筑波大

学本）。

(24) 空海『法華経開題』（大正五六、一七二頁下）。なお、藤井永観文庫蔵「瑜祇塔図」（南北朝期）の裏書には「師口云、大師ハ此塔ヲ重如月殿ト尺給ハリ」とあり、中世において、『瑜祇経』の教理を象徴した瑜祇塔と重如月殿とを関連づける言説があったことがわかる。松本郁代「真言密教界における「金亀」―藤井永観文庫所蔵「瑜祇塔図」をとおして―」（同『中世王権と即位灌頂―聖教のなかの歴史叙述―』森話社、二〇〇五）参照。

(25) 『麗気記抄』第十二「三界表麗気記」（願教寺本）。

(26) 聖冏『麗気記私鈔』巻十二「三界表麗気記」（筑波大学本）。

(27) 聖冏『麗気記私鈔』巻十二「三界表麗気記」（筑波大学本）。

(28) 「重如月殿図」の読み解きは、門屋温氏よりの御教授を参考にした。

(29) 天札抄文については、小川豊生「中世神話のメチエ―変成する日本紀と『麗気記』《天礼巻》―」（『中世の知と学―〈注釈〉を読む―』森話社、一九九七）に詳しい。

(30) 『麗気記』巻十二「三界表麗気記」（神道大系『真言神道（上）』七七頁）。「三界表麗気記」は別名「天札巻」とも呼ばれる。

(31) 聖冏『麗気記私鈔』巻十二「三界表麗気記」（筑波大学本）。

(32) 聖冏『麗気記私鈔』巻十三「現図麗気記」（筑波大学本）。巻十三には、日本紀本尊図にかんする詳細な註釈があり、図像を解釈する上で参考になる。

(33) 総本山仁和寺所蔵「日本紀本尊 宝剣」（御経蔵第八十九箱、第二十三号文書）、「日本紀本尊 神璽」（御経蔵第八十九箱、第二十一号文書）。『特別展 神仏習合』（奈良国立博物館、二〇〇七・四）より転載。『麗気記』の該当図は神体図記におさめられるが、弘法大師全集本（一六七二年版本）では省略されている。また神道大系本は、本居文庫本の図像を用いているが、版本にあわせて図像の配列が変更されているため、本尊図が省略され参照できない。そこで本稿では、『麗気記』と同じ図像をもつ仁和寺蔵の日本紀本尊図を参考として示した。図像の省略については、『麗気記Ⅰ』森本、門屋両解説参照。

(34) 良遍『神代巻私見聞』（古典研究資料集『磯馴帖 村雨篇』二〇〇二、四三三頁）。

(35) 良遍『麗気聞書』巻十八「深秘図麗気記」（神道大系『真言神道（上）』二七四頁）。

(36) 「内侍所」（宝山寺所蔵本。西大寺流末の大御輪寺旧蔵）、「内侍所本尊」（長谷寺所蔵本）など参照。なお、先述の仁和寺本に内侍所図はない。元興寺文化財研究所編『神道灌頂』（同研究所、一九九九）参照。

（37）聖冏『麗気記神図画私鈔』四（筑波大学本）。筑波大学本は「鬼図」「重女」とするが、法然院本により改めた。嵐瑞澂注（7）前掲論文参照。

（38）『麗気記』巻十三「現図麗気記」（神道大系『真言神道（上）』八一頁）。

（39）聖冏『麗気記私鈔』巻十三「現図麗気記」（筑波大学本）。

（40）『麗気記抄』にも「一巻初三種神宝。皆是神璽也。然而各別云時、剱宝剱、独古神璽、三日月形内侍所也」と、内侍所を三日月形とする記述がある。これは、巻二の三種神宝図に対応する記述で、巻十三の本尊図に対応したものではないが、聖冏が参考にし、巻十三の図像と関連づけた可能性がある。なお、縛日羅図の解釈が示されていないが、『私鈔』巻十三には「独股三股五股一物始中終故、非二別物一歟」とあることから、本尊図のうちの鬼面独古と縛日羅を同体と考えていたことがわかる。

付記

貴重な資料の閲覧・調査・使用をご許可頂いた諸機関に御礼申し上げます。小稿は、平成二十一年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）にもとづく研究成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員）